

氏名	治部 亜美香
ヨミガナ	ジブ アミカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第562号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 胎吹きガラスによる感覚的洞察と女性性の可視化 〈作品〉 繫縛 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原 信幸
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三上 亮
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

近年、ガラス工芸の世界では、次々と新しいガラス表現が開発されている。それは伝統的なガラス技法を素地としたものから、ガラスという概念自体を覆すような新しい展開に至るまで、実に多様化しているといえる。筆者は金属、ガラス、陶の素材を学んだことが結びつき、現在の表現手法へと至ったわけだが、本論文では、簡単なガラスの性質を述べるにとどめ、歴史や技法に関しては、必要なもの以外、言及しないものとする。

始では、筆者の考える女性についての問題意識を述べる。現在、国際化が進行し、少子高齢化や女性の社会進出など、日本における社会の移り変わりに伴い、女性観や、自己形成の見直しなどが注目されてきているが、女性差別の意識は依然として根強く残り、特に芸術の分野においては、女性芸術家への理解が低いまま、女性は表現者として十分なパフォーマンスが発揮出来ず、作品の真価が正しく判断されない状況にあると感じている。

第一章では、女性について論じる前提として、人間の自己形成に関する背景を分析する。何故なら女性の問題は、自己と周囲の環境によって形成されるため、人間が形成されるにあたって影響を与える環境要因を整理し、可視化することが重要であると考えからである。第1節では、問題の背景にあたる世間や、家族という共同体社会で起こる、同調圧力の仕組みについて論じる。第2節では、第1節で述べた共同体内による抑圧から、自己の中に「殻」と「核」が生まれるとし、その存在をアダルト・チルドレンの概念から解き明かす。第3節では、芸術による禁忌の問題意識を例に、直感と身体を手掛かりに、自己意識の中で眠る「殻」と「核」を可視化する方法を考察する。

第2章では、女性の性について論じる。女性の性を語ることと芸術との関係性は深く、それは芸術において大きなテーマとして更に理解を深め研究する価値があると考え。フェミニズム、ジェンダーを論ずるには、多様なアプローチがあるが、本論文では女性の性に着目するに留める。LGBT、ジェンダーレスなど多様なセクシャリティがあるが、他の分野には基本的に言及しないものとする。第1節では、女性を巡る問題をあげ、また、共同体で形成された女性観を検証する。第2節では性をテーマに、性の

不可視化された問題と、性の持つ力を、春画を例に考察し、女性の身体から自己意識への繋がりを検証する。第3節では、抑圧された歴史の中、創作活動に挑んできた女性芸術家達の軌跡と作品を紹介する。女性芸術家たちの、作品にかけるエネルギーは、見るものを圧倒させる力がある。その作品の多くに性に扱った表現が見られるが、ここで述べる女性の性表現とは、男性の性概念と大きく異なることを強調しておきたい。女性の性表現は、生命の繋がりに由来する母の存在、異性への恋慕や嫉妬の念、子への慈しみなどを主題とするケースが多く、それに伴い表現の手法にも率直さが窺える。フリーダ・カーロ、草間彌生、アリーナ・シャポツニコフなどの作家を例に、創作活動に対する姿勢から、女性の立ち位置や、共通して見えてくる「子宮」の存在について述べる。

第3章では、筆者のこれまでの制作過程を述べ、2章まで述べた不可視化との関連性を述べたい。女性の持つ肉体の柔らかさや、精神の強いエネルギーの印象を表現するには、有機的な造形が可能で、更に透過性を持つガラス素材が適材であると考えている。鑑賞者が見ることができるのは、既に成形された作品である。そこに至る工程には、制作者の経験と知識、培われた直感といった背景があるが、それを知る者は少ない。筆者は吹きガラス技法の成形時に見える景色、またその時に生じる直感と身体が融合された感覚の洞察は、本論文のテーマと結合していると感じている。制作にあたっては、金属や陶磁器を胎とし、そこにガラスを吹き込み、成形する技法を用いる。胎にガラスを吹き込む瞬間に起こる素材の動きや表情は、予測不可能であり、偶然による形が生まれる。そこには理屈の及ばない世界観が可視化され、抑圧からの精神の解放や、生命の持つ強いエネルギーなど、様々なイメージを連想させる作用がある。それらを用いて、成形、加工した作品とともに、吹き込みを行っている映像を交え、インスタレーションによる表現手法を試みる。筆者の思う作品の完成形は、完成した作品とは別に、制作過程に見える光景、特に胎にガラスを吹き込んだ際に見える景色を映像として同時に展開する事にある。また、陶磁器に吹き込んだ際、温度差によって胎の陶磁器に割れが生じ、その中からガラスが膨らむ姿は、生命の内側からの力や強い鼓動を感じ、筆者の思う「可視化」表現に繋がると考え、博士審査作品とともに検証する。

結では、これまで述べた章立てを振り返り、本論文の意義や、今後の課題を述べ、まとめとする。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、女性が抑圧されている状況が不可視化されているという問題意識に立って、それを可視化する美術表現の可能性を誠実に追求しようとした論文である。女性に焦点を当てているが、すべての弱者、抑圧されている者にまで普遍化されうる視点に立っている。美術が社会的な問題や人間が生きることと深くつながっていることを示す好論文である。具体的には以下の点が優れている。

第一に、女性が抑圧されている社会状況を問題視するだけでなく、それが同調圧力や歪んだ親子関係などによって不可視化されていることを指摘し、美術表現はそうした問題を可視化して対峙する可能性を拓くものであることを指摘している点。

第二に、男性の視点から捉えられてタブー視されている性の問題を、女性の身体に取り戻すことで、女性が生き活きと生きることと不可分であることを示している点。多くの女性芸術家の作品や笑い絵と呼ばれた春画などに言及することで、性の表現が女性の身体性や自己認識に深く関わる根源的な意義を持つことを明らかにしている。

第三に、女性の身体性についての議論と、胎吹きガラスという作品制作との結びつきが説得力をもって論じられている点。申請者は、金属や陶器・磁器にガラスを吹き込んだ作品を修了制作として作っている。異素材に吹き込まれたガラスは、殻を破ろうとする破裂の側面と、他方で丸くならうとする調和の側面を持ち、この背反するものを矛盾ではなく統合的に表現する作品について考察することで、女性を取り巻く抑圧と、しかしそれを突き破ろうとするエネルギー、同時に丸みを帯びたフォルムが女性の身体の美しさにもつながることが明らかにされ、理論と制作とが十分にリンクして論じられている。

以上のように、本論文は申請者にしか書けないオリジナリティに溢れており、当初は個人的な関心に貫かれているかに見える叙述が、行論のなかで普遍的な課題へとつながって、申請者に続く女性芸術家

を励ますものとなっており、博士学位に値する優れた論文として評価した。

(作品審査結果の要旨)

治部亜美香の博士審査作品「繫縛」は、ガラスと異素材によって表現されたオブジェ作品に象徴されるが、編まれた赤い糸や、素材作品制作工程を映し出す映像も取り込み、独特のエロティシズムをもって痛々しきや生命の尊さまでも感じさせる。作者のテーマである女性性の可視化を試みた集大成というべき作品となった。

作者は学部を東京芸術大学工芸科の鍛金に学び金属を叩くその作業を通じ、当初から自己の内面世界と表現の一致と言う極めて今日的な工芸へのアプローチを早くも感じ得ていたようだ。修士課程はガラス造形に進み、鍛鉄ガラス吹き込み技法を駆使し「性」に対する日本人の意識、宗教、ジェンダーなどをテーマにし、エロティシズムたどる作品を制作している。博士課程進学中には、ポーランドのプロツワフ美術大学に留学し新たな環境のもと、海外の作家および指導教官の作品制作における強固な自己意識に気づき改めて表現することにめざめて帰国しているようだ。帰国後、女性性をめぐるテーマで吹きガラスの作品やインスタレーションを試みている。そのなかで、ポーランド留学時に制作した作品、制作工程から起こる普通は失敗ともいえる状態に着目し新たな表現としている。それは、磁器鑄込み技法で女性のトルソを成形し、その後に傷を負ったように彫りを入れ焼成し、さらにガラスを吹き込むというプロセスで起こる現象である。制作上、トルソの外側は急な温度上昇で割れるが、吹き込まれたガラスは割れずに残る。博士審査作品の核となる傷ついたトルソはこのようにして一つの表現となった。

作者はこの技法でインスタレーションとしての複合的作品と単独の一作品としての展示をおこなった。この鑄込み技法による女性のトルソの内側部分、中空の空間にガラスを吹き込むことにより出来る磁器の亀裂とガラスの関係を一点の作品としてみると、まだまだ技術的に未熟な部分は残る。

しかし一方、今回の会場全体を大きく使って制作された作品は、ひとつの型から生み出されたトルソの数々、吹きガラスの塊から空気が吹き込まれてゆくプロセスを表したガラスのオブジェ、さらに中空に展開される赤い蜘蛛の糸と絡む吹きガラス、さらに透明のスクリーンに映し出される吹き込みガラスの作業映像により、鑑賞者に「生命誕生の記憶」「生と死」「過去と未来」などのイメージを喚起させる作品は、空間インスタレーションとしての迫力やそれを読み解く面白さに満ち溢れているように構成されている。

作者がテーマにしてきた「女性性」をめぐる問題は、我が国においては、ともすると目を背けられがちな影の部分であり、男性は語ることを忌避する傾向があると思われる。このような受け入れられにくい問題意識を作品化し、アートとして発信することは、精神的にも肉体的にもおおきな労力を伴うであろう。身体を使う制作である以上畢竟、創造する楽しみや喜びが生まれ、癒され、解き放たれていく作者自身の回復するプロセスとして重ね合わせてみることもできるのではないか。作者が制作上、克服し獲得した成長部分があることで、この作品自体が社会に対し又、人々の未来に訴えかける大いなる力を持っているのだと思う。博士学位に相当する作品として判断する。

(総合審査結果の要旨)

申請者は修士の学生の頃より、鑄造や鍛造で作られたオブジェにガラスを吹き込んで作品制作をしてきたが、博士課程進学にポーランド留学の経験から生み出した、焼成された鑄造磁器にガラスを吹き込むという独特な技法を見出した。磁器部分は、陶芸研究室の協力を得て数多くの人体制作を行った。

学部初期の頃より、申請者は個人的な問題として周りの社会との違和感を持っていたが、物を作り表現することを通して上手く社会との適合を目指し、試行錯誤をしていた。そして、修士課程、後期博士課程と進みながら、自身の制作動機と制作された作品又、時には鑑賞者との間を行き来し、検証しながら、言語化することを学び、積み上げていった。

少しずつの歩みであったが、素材を変えながら、手法、形を変えながら掘り起こしを続けていた結果

が、ひとつの普遍的な表現へとたどり着いたといえる。

博士審査展に於ける展示では、特にインスタレーションとして、作品の数や作り方のスタイルが複数あり、更に映像を使用するなど、ひとつの空間に多くを盛り込んだことで、見るものに与える情報が多すぎるくらいがある。しかしながら、ガラス制作の過程を映像で記録し、編集したものを会場で展示する試みは、つくり手が観客に対し歩み寄り、制作のプロセスを共有しようとするものであり、造形素材に直接働きかけ取り組む工芸のあり方のひとつの試みとして効果的なものかもしれないと感じた。未だに表現としては、生々しく十分熟したものとなっていないが、それだけに作者の思いの強さと深さを感じさせる出来になったとも言える。論文の内容と相まって「女性性の可視化」というテーマに沿った女性ならではの表現としてみることができ、更に作家自身の独創性を充分感じる力強い表現となったと評価した。